



各班の報告

著者	櫻木 潤, 藤岡 真衣, 和住 香織, 松永 友和, 中尾 和昇, 影山 陽子
雑誌名	NOCHS Occasional paper
巻	9
ページ	10-15
発行年	2009-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/2993

各班の報告

ありのままを体感する

P.D. 櫻木 潤

A班

〔留学生〕

アナスタシア・グバール（25歳・ロシア）

セシル・ブルー（22歳・フランス）

金東（24歳・中国）

アレクサンダー・バット（21歳・イギリス）

宋潤珉（25歳・韓国）

〔学生ボランティア〕

竹位 奈都美（文学部4回生）

野口 晴加（法学部1回生）

今回のフィールドワークで心掛けたことは、「ありのままを見て、ありのままに体感してもらう」ということである。余計な説明はなるべく省き、先入観なしで平野を見て感じてもらう。型通りの日本案内は平野の町には似合わないし、日本に来て間もない留学生が何に興味を示すのか、私にとってもそれがカルチャーショックを体感することになると思ったからだ。

バスを降り立ち、まずは全興寺に向かった。境内を一巡した後、杭全神社へ。境内では、拝殿前の狛犬に関心を示す者、門前にずらっと並んだ寄進者の名前に興味を示す者、それぞれが自身の関心のままにカメラ片手に境内を探索していた。一同空腹を訴え、少し早めの昼食をとり「おも路地」に戻る。途中、亀乃饅頭に立ち寄り、饅頭に挑戦してもらった。

昼食を済ました後、雨脚が強くなったこともあり、商店街をぶらぶら。「和菓子屋さん博物館」にある落雁の型を熱心に見入っていた様子は印象深い。その後、「おも路地」で、ケン玉・独楽など、昔ながらの日本の遊びに興じた。こちらが舌を巻くほどあつという間にコツをつかんでケン玉の技に挑戦する者、独楽まわしの紐に悪戦苦闘する者、女性は折り紙など、それぞれが熱心に取り組んで

いた。もちろん私も引率者であることを忘れて一緒に楽しんでしたが、こうした昔ながらの日本の遊びを留学生に教えてくれたのは、平野の子どもたちであり、平野の方がたであった。思いがけない国際交流になったが、教わる留学生、教える平野の方がたのどちらもがとても真剣で、それぞれがいい顔をして楽しんでいる光景は忘れることができない。



ケン玉遊びに夢中になる留学生たち

時間を忘れるほど熱中していたが、午前中の写真が出来上がり、レポートの作成となった。それぞれの選んだ写真を見ると、私には思いもよらない視点のものあり、選んだ理由にもわれわれとは異なった感性のものあり、と驚きの連続であった。

「ありのままを見て、ありのままに体感してもらう」という試みは、少なくとも私にとって多くのカルチャーショックを与えてくれ、来日間もない留学生の目線や感性は刺激的であった。写真を選んだ理由を、言葉でどう表現していいのかわからないと悩んでいた彼らの姿に、文化遺産とは、案外、そのような言葉で表現できないものの中にこそあるのではないかと感じた。



熱のこもったレポートの作成

平野の文化遺産に出会って

R.A. 藤岡 真衣

B班

〔留学生〕

韓 一瑾 (25歳・中国)

ファイザー・ブッダール (22歳・フランス)

アレクサンダー・ブシェー (21歳・アメリカ)

クレア・マザーソール (20歳・イギリス)

〔学生ボランティア〕

鷺見 素直 (文学研究科博士課程前期課程2年)

松本 友希 (文学部1回生)

茅本 愛子 (文学部1回生)

B班は、午前中に全興寺、商店街、大念仏寺、かたなの博物館、亀乃饅頭をまわり、午後は平野映像資料館、杭全神社を散策した。

全興寺では、本堂や灯籠を写真におさめる留学生の熱心な姿がとても印象に残った。また、お地蔵様や水掛不動に手をあわせる地元の方の様子も、彼らにとっては関心の一つであったようだ。全興寺から商店街に出ると、店先の商品やその並べ方にも興味を持った。店に飾られた商売繁盛の護符に気づくと、どのような意味があるのかという質問もあり、彼らにとっては商店街の景観も日本文化の一つとして感じられたようである。大念仏寺へ向かう途中、いくつかの寺院を通りかかると、門前のたたずまいや瓦の形に関心をもち、それに見入る姿が印象的だった。大念仏寺を訪れると、まず広い境内を散策した。本堂では法事が行われている最中で、経が読み上げられる声に留学生はしばし耳を傾けていた。「かたなの博物館」の見学では、日本刀の製作技術や飾られた刀について質問する場面がみられた。亀乃饅頭では、白兎の形をした和菓子や鶯色の饅頭などを買い求めた。昼食後は留学生たちの中で、饅頭の形などの話題で盛り上がった。

午後からは、「平野映像資料館」を訪れた。館長さんのご厚意で、80年前の日本やアメリカの風景、そして50年前の中国の映像を見せていただいた。特に中国やアメリカから来た留学生は、

往時の国の様子を、遠くはなれた平野の地で見ることができ、大変驚いていた。杭全神社の散策では、本殿・拝殿・狛犬の意味について質問があり、一つ一つの問いが私たち日本人にとっても考えさせられるものであった。また留学生から、寺や神社が住まいと混在している風景は、平野にかぎったものなのか、又は日本でよく見られるものなのか、と尋ねられた。私達の生活の中にとけこんでいる寺や神社のある風景が、留学生にとっては不思議なものとして受けとめられていることに改めて気づかされた。



会話がはずんだ昼食のひととき(おもろ地)

全興寺へ戻ると、学生たちはレポートの作成にとりかかった。日本語で散策の感想を記すのは決して容易ではないが、ボランティアの人びとも一緒になって、お互いに意見を交わしながら文章作りが進められた。

私たちB班の散策では、留学生がそれぞれに平野の文化と出会い、そして何かを発見したようであった。それらの発見が、学生自身にとって文化遺産を模索する過程なのだと感じた。



古いネガを熱心に見る留学生(平野映像資料館)

人びとのささやかな日常を見た平野

R.A. 和住 香織

C班

〔留学生〕

盧 奕安 (22歳・台湾)

トリンカ・クロフォード (24歳・アメリカ)

マリン・レイモンド (21歳・フランス)

ラドワ・アマーリ (19歳・エジプト)

ローランド・ユウタ・ヘンドリクソン

(19歳・アメリカ)

〔学生ボランティア〕

森田 真広 (文学研究科博士課程前期課程2年)

原田 恒恵 (法学部4回生)

ズオン・ゴック・フォン (商学部2回生)

C班は午前中は杭全神社、午後からは大念仏寺を訪れた。この日はあいにくの雨模様で、傘を差しながら町を歩くことになった。身軽に気軽に平野の町を感じてもらいたかったが、留学生の目には雨の大阪・平野がどのように映っていただろう。

午前中には杭全神社を訪れた。道行く途中、和菓子屋があった。立ち止まって、いろいろな形の和菓子が並んでいるショーケースを覗いた。「和菓子は季節の移り変わりを表現しているのだ」と説明すると、興味深く聞いているようだった。中には買い求めて、早速頬張る学生もいた。買い食いを楽しむのも町並み散策にはつきものである。



留学生に人気だった和菓子

和菓子屋を通り過ぎ、車の往来の激しい国道25号線に出た。杭全神社の大きな鳥居があり、その東側には金光教平野教会が建っている。一見

すると同じ敷地内にあるように見えるので、「これも神社なのか？」という質問を留学生から受けた。大きい鳥居をくぐり、お茶池や日露戦没記念碑のある参道を進んだ。「百福廻来」とある標柱をくぐると、すぐ左手には大きな楠の木がある。幹回りが8メートルもある大樹で、そこで留学生たちは盛んに写真を撮っていた。大門をくぐり、境内では自由に歩いてもらった。拝殿の前にいる狛犬の足になぜたくさんの紐が巻きつけられているのか、など、普段私たちが見ているのに気に留めていないことに留学生たちは注目していた。

しばらく神社で過ごしたあと、昼食を取るためにいったん全興寺に戻った。その道筋は、午前と同じで、和菓子屋を通るルートである。これは和菓子を買いたい留学生からのリクエストだった。

午後からは大念仏寺を訪れた。寺へは商店街を抜けて行った。商店街は日曜日で休業している店舗が多かったが、女子留学生がカバン屋や和装雑貨店で立ち止まり、ちょっとしたウィンドーショッピングを楽しんでいた。

寺ではお堂の中に入り、雨音が聞こえる中、静かに佇んだ。信仰している宗教の違いなのか堂内には入らない人もいたが、「建物や木がとにかく大きく、整然としている」と感嘆していた。

北野武の映画の世界を見て日本に来た人、商業や経済を勉強するために来た人、と留学生の専攻はさまざまである。留学生にはごく普通の大阪の町の様子を見てもらうように努めた。平野の人たちの町に対する取り組みは、「ごく普通」とは言えないものかもしれないが、毎日の生活の中にある、人々のささやかな営みを感じてもらっていたら幸いである。



雨の中でも元気だったC班メンバー

留学生の好奇心

R.A. 松永 友和

D班

〔留学生〕

張 怡 (21 歳・中国)

柳 知賢 (21 歳・韓国)

ジュリアン・シメオン (29 歳・フランス)

マリア・ゲーデ (26 歳・デンマーク)

カーラ・モーガン (20 歳・オーストラリア)

〔学生ボランティア〕

岩阪 愛 (法学部 1 回生)

池上 倫子 (文学部 4 回生)

当日、本部が置かれた全興寺^{せんこうじ}を出て、まず向かったのは杭全神社^{くまた}。杭全神社は「鎮守の森博物館」と呼ばれるだけあって、境内の巨木に何人かの留学生が驚いている様子だった。神社ではまずお浄めと参拝の仕方を伝えた。信教の自由もあり、実際に行なうかは各自にまかせた。そのあと自由に散策してもらった。当日はあいにくの雨にも関わらず、灯笼や本殿を食い入るように観察する留学生もいた。そのあと、全興寺に戻り昼食をとった。



杭全神社でお浄めをする留学生

午後からは、まず大念仏寺^{だいねんぶつじ}に向かった。大念仏寺でもしばらく自由時間をもうけたが、その間、目を閉じて静かに祈る一人の留学生の姿が印象的だった。また、ある留学生は、「仏様の持っているものは何か」、「この神様はどんな人か」など、

さまざまな質問をし、私自身返答に窮してしまうこともあった。あらためて留学生の好奇心の高さとこちらの知識不足を認識した。



レポートを作成する留学生

大念仏寺をあとにして、続いて「かたなの博物館」、「平野映像資料館」を訪れた。「かたなの博物館」では、展示されている刀をじっと見学し、そのあと実際に日本刀を手を持たせていただいた。ほとんどの留学生は、はじめて刀を持つことができ、喜んでいる様子だった。「意外と刀は重いですね」と感想をもらす留学生が多かったが、ある留学生は、こちらが「刀を持たせてもらえるよ」と伝えても、「私は少し怖いから遠慮します」と答える留学生もいた。

「平野映像資料館」では、文化大革命以前の中国の映像を見せていただいた。はじめて見る古い映像に留学生は興味津々の様子だったが、なかでも中国からの留学生は、最後まで興味深く映像を見ていた。その後、全興寺に戻り、D班の「大阪探検」は終了した。

日本に来て一ヶ月の留学生にとって、平野はどのように映ったのであろうか。日本に留学するだけあって、日本のあらゆるものに興味を抱いている様子だった。平野を歩いている途中にも、留学生から「あの家にはなぜ布^{のれん}（暖簾）が掛かっているのか」、「この店は何を売っているのか」など、さまざまな質問を受けた。留学生と一緒に歩いてみて、あらためてこちら側の語学能力の必要性を実感するとともに、自分自身、国内でも実はまだまだ知らないことが多いということを、留学生から教えられた。

おもい 意思を伝える—留学生と歩いた平野—

R.A. 中尾 和昇

E班

〔留学生〕

周 嬌妮 (20歳・中国)

楊 遠翔 (21歳・台湾)

ジェシカ・ホートン (20歳・アメリカ)

アントニー・リエベン (23歳・フランス)

ヘレナ・ラム (19歳・アメリカ)

〔学生ボランティア〕

元國 有梨 (文学部1回生)

山口 琴世 (文学部3回生)

E班は、留学生の希望もあり、まずは杭全神社を訪れた。最初に杭全神社の由緒について簡単なレクチャーをしたあと、留学生には杭全神社内を自由に散策してもらった。狛犬や奉納された絵馬を熱心に見入っていたのが印象的だった。続いて、大念仏寺を訪れた。平日ということもあり、人は少なかったが、その分自由に見て回ることができた。留学生たちは、興味のある建物などをカメラに収めていた。その後、全興寺に戻って昼食をとった。阪神タイガースのデザインが入った大阪弁当に少し戸惑い気味だったが、とても満足した様子だった。



杭全神社の奉納絵馬に興味津々

午後からは、まず全興寺内の「駄菓子屋さん博物館」を訪れた。留学生たちは、とりわけ博物館の外に設置されているパチンコに夢中になってい

た。全興寺を出て、近くの「和菓子屋さん博物館」に向かった。ご店主に和菓子の作り方や木型について教えていただき、留学生たちはたどたどしい日本語ながら熱心に質問していた。甘いものが好きなのは万国共通のようで、それぞれお土産に和菓子を購入していたのが印象深かった。その後、平野公園内にある赤留比売命神社に向かった。留学生の一人が、「本殿の中には入れないのですか?」と聞いたので、「あそこは神様がいる場所なので入れないんですよ」と教えたら、なんとか理解してくれたようだった。雨の降りしきる中、再び全興寺方面に戻り、「もう一つの和菓子のお店に行きたい」とのリクエストがあったので、亀乃饅頭に行くこととなった。ここでも留学生たちはどの和菓子を買おうかと悩んでいる様子だった。最後に、「かたなの博物館」を訪れた。館長さんのご好意で、実際に刀を持たせてもらった。思った以上に重量感があるので、留学生たちは驚いていた。



かたなの博物館にて

私が担当したE班の留学生たちは、神社や寺院に大変興味を持っていた様子だった。特に杭全神社には特別関心が強く、彼らが撮影した写真の多くに、狛犬や絵馬などがおさめられていたことに強い印象を受けた。ただ、留学生に神や仏の意味を理解してもらおうと説明したものの、なかなか上手くいかなかったことが少し心残りだった。〈意味〉を伝えることと〈おもい〉を伝えることの違いを感じた一日だった。

さまざまな感性と 町の温かさに触れた一日

R.A. 影山 陽子

F班

〔留学生〕

李 旖旎 (28歳・中国)

ジョセフ・レーサム (20歳・イギリス)

ミヒャエル・ヴィッターアウフ (24歳・ドイツ)

スコット・コズマ (20歳・アメリカ)

〔学生ボランティア〕

亀田 剛広 (文学研究科博士課程前期課程2年)

F班は、留学生4名、スタッフ1名とR.A. 1名という、他の班に比べれば少ない人数での行動となった。人数の都合で外国語ができるボランティアはいなかったが、留学生は全員日本語での会話が可能であり、会話を苦手とする留学生には日本語が堪能な留学生が通訳してくれたため、意思の疎通はスムーズだった。

我々はまず、環濠跡を見たいという留学生の希望により、平野郷の東の端にある平野公園の環濠跡へ向かった。商店街の祭用品を売っているお店の前を通ったとき留学生にだんじりとは何かと聞かれたが、形状等をうまく説明できなかつたので、平野公園に向かう途中にある「ちっこいだんじり館」に寄った。だんじり館は閉館していたが、店先のショーウィンドウに展示してある、だんじりのミニチュアや祭の写真などは見られるように



店先の狸と蛙に夢中

なっており、祭とだんじりについて留学生にきちんと伝えることができた。

平野公園の環濠跡は土手の跡だけで水は流れておらず、留学生たちは少々残念そうだった。隣の赤留比売命神社では猫が住み着いており、神社の本殿とともに猫にも夢中であった。

公園を後にして商店街へ戻り、南港通り沿いの「珈琲屋さん博物館」へ向かった。途中、小料理店の店先にある、なんでもない狸や蛙の置物や、おかき屋さんが販売するお餅、平野郷の境にある地藏堂など、さまざまなものに興味を持っていた。

「珈琲屋さん博物館」を開いている喫茶店「珈琲苑・茶坊主」は通常通り営業中であったが、ちょうどお客さんが少ない時間帯であったため、大勢での見学も快く迎えてくださった。留学生たちは展示されているさまざまな珈琲道具や、古めかしい電話機を模した公衆電話（実際に使用できる）に興味を持っていた。



F班メンバーとお別れ

いったん全興寺に戻っての昼食の後は、杭全神社に向かった。手水の仕方を教えた後は、各自で境内を好きに回ってもらった。拝殿や本殿、寄進者の氏名を刻んだ石柱など、興味の先はさまざまようだった。神社敷地内にある、今も水が流れている環濠跡も案内した。

その後、商店街を歩いて全興寺に戻った。留学生たちは少し寂れた、昔ながらの店舗の並ぶ商店街を面白そうに見学して回った。呉服店で着物の写真を撮る子もいれば、日本人から見ればごく普通の薬局店内を撮る子もいた。日本人とは異なる感性を楽しめた一日であった。